

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 高橋亮介

高橋亮介氏の博士論文”A Predicate Decomposition Approach to Dative Verbs in German” (述語分解に基づくドイツ語与格動詞の語彙意味論的研究) は、与格を目的語とするドイツ語の二項動詞 (以下、二項与格動詞) を語彙意味論の観点から精密に分析することにより、その項実現にとって関与的な動詞の意味成分の抽出を試みるものである。

本論文は 8 章からなり、まず第 1 章では、研究の対象と目的について述べる。語彙意味論において非規範的とされる二項の与格動詞を中心の研究対象とし、三項動詞と自由与格は扱わない。従来の研究では、二項与格動詞の項実現がそれぞれの動詞の個癖性に帰される傾向にあったが、これらの動詞が共通に持つ意味から説明され得ることを明らかにし、その結果、語彙意味論の基本的枠組みに新たな提案を行うことが目的である。

第 2 章では、ドイツ語の与格目的語に関する代表的な先行研究を検討し、問題点を指摘する。意味役割分析に基づく研究は、言語学上の原初概念として設定される「意味役割」によって説明できない与格目的語の意味を有生性という意味素性によって記述するが、与格目的語が非有生の場合の説明に妥当性を欠く。また、プロトロール理論に基づく研究は、様々な二項与格動詞に共通する意味特徴、およびこれらの動詞と意味的に近似する二項対格動詞との項実現上の違いを適切に捉えられない。

第 3 章では、第 4 章以降で展開される意味分析で用いられる述語分解の分析手法を検討し、2 章で取り上げた先行研究よりも同手法が優れていることが主張される。述語分解とは、意味構造と定項 (root)、いくつかの原初述語からなる意味構造鑄型と項構造をリンキングによって結ぶものである。

第 4 章では、所有を表す haben 'have' と gehören 'belong to' のリンキングパラドックスの解決法を示すことを通じて二項与格動詞の基本的な意味構造が提案される。haben と異なり gehören には様々な意味的・統語的制約に係ること、gehören と sein に並行性があることを指摘し、二項与格動詞である gehören に対して BE-AT に所有の意味野を表す素性 POSS が付加された以下の意味構造が設定される。

gehören 'belong to': [y BE-AT_{POSS} z]

第 5 章では、主格名詞句と与格名詞句との所有以外の静的関係を表している「関係動詞」を扱う。関係動詞は、意味的に fehlen / mangeln 'lack' などの欠如動詞、gefallen 'please' などの与格心理動詞、ähneln 'resemble' などの与格対称動詞に分けられるが、

統語的・意味的振舞いの共通性によって、意味述語 BE-AT_{POSS} の第一項位置が、変項を従える定項によって充足された以下の意味構造鋳型が共通に認められる。

fehlen / mangeln 'lack': [<LACK>(y) BE-AT_{POSS} z]

第5章では、さらに begegnen 'occur to' のような出現・発生动詞について以下が提案される。

begegnen 'occur to': [BECOME [y BE-AT_{POSS} z]]

第6章では、danken 'thank'、helfen 'help'、trotzen 'resist' などのように主格名詞句が何らかの活動を行う「活動動詞」を扱う。与格目的語を従えない arbeiten 'work'、tanzen 'dance' などの活動動詞と与格活動動詞との意味的・統語的共通点ならびに相違点を明らかにすることにより、前者が単純事象構造を成しているのに対して、後者が三項与格動詞と並行する複雑な意味構造を有することを示し、以下の意味構造鋳型を提案する。

helfen 'help': [x ACT] CAUSE [<HELP> BE-AT_{POSS} z]

第7章では、与格目的語を従える複合動詞を扱う。複合動詞の場合は、基礎動詞の意味構造によってではなく、接頭辞によって与格が導入される。接頭辞 zu- を伴う動詞を取上げ、zu-によって導入される与格目的語が到達点としての解釈に加えて受容者としての解釈を示す場合は、同目的語に該当する項が意味構造レベルにおいて直接内項と同一の副事象内に位置付けられる場合であることが示される。この条件は、これまでに扱った単一動詞の二項与格動詞に設定された意味構造レベルの条件と同一である。

第8章では、これまでの議論を要約した上、意味述語 BE-AT_{POSS} を仮定する本論文の分析が二項与格動詞のみならず、三項の与格動詞をも統一的に説明し得ること、さらには、日本語との対照分析への応用が可能であることが示唆され、本論文の語彙意味論全般への理論的意義を明らかにしている。

審査委員からは、複合動詞の分析では、zu-以外の接頭辞を伴う動詞でも、接頭辞の意味と基礎動詞の意味との関係を検証する必要があること、述語分解の枠組みによって捉えられる意味だけを文法的に有意義であるとするのは問題であることなどの指摘がなされた。しかし、二項与格動詞を統語的・意味的な特徴に基づいて精確に分類し、各グループに共通する意味特徴を明らかにしたこと、また、述語分解の枠組みに新たに導入した意味述語 BE-AT_{POSS} を軸に二項与格動詞の意味を統一的に説明したことによって、記述面と理論面の双方において大きな貢献をなしており、課程博士論文として高いレベルに達しているとの結論となった。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。